

[個別論文]

アメリカのLesson Studyにおける日本の授業研究の受容と評価

的 場 正 美*

- 1 研究目的
- 2 研究方法
- 3 アメリカへの日本の授業研究の導入と発展
- 4 授業研究集団とその特徴
- 5 アメリカにおける日本の授業研究の関心領域を区分する枠組
- 6 アメリカにおける授業研究集団の日本の授業研究への関心
- 7 制度や体制に関わる実践的課題
- 8 授業研究の方法と方法論

1 研究目的

小中学校の教師が授業を他の教師に公開し、その授業を共同で検討する授業研究は、日本においては明治時代からの長い伝統をもっている（稲垣忠彦 1995、豊田ひさき1988、清水静海、磯田正美、大久保和義、馬場卓也2005）。明治時代の初等教育においては、スコット（M. Scott）による一斉授業の導入、伊沢修二等によるペスタロッチの開発教育の教育方法の導入に続いて、ハウスクネヒト（E. Hausknecht）のヘルバルト主義の5段階教授法は広く日本全国で実施された。稲垣によると多くは3段階に省略された教授方法が実施されていたが、教師はこの教授法による研究授業を実施し、それを相互に批評するという学校における教師たちの手による授業研究が行われていた。5段階教授法という1つのモデルがあり、それを練り上げるための授業研究であった。しかも、そこで使用される用語はヘルバルト主義によって刻印されており、驚くべきことは日本全国でいわば共通の用語が使用されていたことである。明治末期から、一部では単級学級あるいは複式の学級で異学年の子どもに教授しなければならない現実的な必要から自学学習の開発がなされつつあった（深谷 2007）。その一方でアメリカにおいては進歩主義教育と呼ばれ、ドイツでは改革教育学と呼ばれた新教育運動はイギリス、イタリア、アメリカで始まり、広く展開され、その影響は日本にも及び、自由教育（千葉師範学校）、分団式動的教育法（明石師範学校）、ダルトンプラン（成城大学附

* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

属小学校) など後に大正自由教育と呼ばれる教育が師範学校や私立学校で多様に展開されていた。これらの学校においては、新しい教育方法の開発や発問の研究、子どもの発表などについて、授業を公開し、その後に批評会を行うという授業研究が実施されていた。その授業研究においては、それぞれの授業研究会でその会独自の中心的な用語が使用されていたことが、ヘルバルト主義教育による授業研究とは異なる点である。例えば、千葉師範学校の授業研究においては、新カント派による自由という用語が中心に語られてるように、教師たちは、自分たちの授業を方向付け、検討するための“ことば”を手にし、授業研究を進めていた。教師自身がそれぞれ欧米からその思想を取り入れ、独自に授業を開発し、授業を公開し、それを相互に批評するという教師自身の手による研究授業が展開されていたという点で、ヘルバルト主義にもとづく授業研究の時代とは異なっている。それまでのヘルバルト主義に刻印された、東京大学、高等師範学校、各師範学校、そして広く各学校へと中央から地方へ浸透していた、いわば用語の帝国主義的使用から、それぞれの教師自身の思想に刻印された、地方に根を持った、いわば用語の個性的使用へ移っていた。そうはいつても、授業研究は教師自身の手によるものであった。

授業研究は戦後に再び注目され、ポーランドやロシアの影響を受け、1970年代には、多くの大学において授業研究の研究がなされ、小中学校において授業研究が実践された(馬場、1965)。この時期の授業研究の特徴は、教育の科学化を志向していたことである。この志向は、多くの場合、大学の教師によって意図されたものであり、その後、授業研究は学校現場との連携をとりつつも、授業研究の方法はより科学的手続きをとるようになってきた。そのために、戦前までの共通の特徴であった教師の手による授業研究の特質は、変質することになる。学校の抱える諸問題を研究課題に掲げ、現場からの授業研究をつづけることのできた学校は少数になり、多くはその時々主張された新しい教育方法の実験的試みを公開授業として実施し、それを反省するという授業研究であった。1970年代の授業研究の評価は確定していないが、小中学校において教師自身が研究課題を掲げ、研究授業を実施し、教師が共同して授業研究を行うという少数の方向と大学の教師による授業研究の開発とその応用、もしくはいくつかの学校と連携しながらも、それとは分離された授業研究をすすめるという傾向が見られる。戦前までの授業研究と比較すると、教師の手から大学の教師の手へ授業研究が移ったことが大きな特徴であるといえる。執筆者は、授業研究が教師の手から分離され、大学における授業理論の開発と学校におけるその理論の実施という役割が成立したと判断している。そしてその2つの独立した役割を結合したアリーナは、日本教職員組合であり、多くの民間教育団体であった。

しかし、1980年代後半に不登校問題や校内暴力などの教育問題や教師の多忙化により、小中学校における授業研究は衰退していった(秋田、2005)。ところが、1990年代になってくると、授業研究を中心とした学校改革(佐藤、2001、2002、2005)やTIMSSとPISAの国際学力調査を背景としたアメリカにおける日本の授業研究への注目(Stigler、1999)がなされ、授業研究は三度目の注目をあびてきている(橋本吉彦、坪田耕三、池田敏和、2003)¹。日本の授業研究への注目とはいっても、それは日本の大学において蓄積された授業研究ではなく、日本の小中学校で実施されている授業研究である。日本の学校において現実に展開されている、ある意味では明治時代から生き続けている、授業研究こそが、日本の児童生徒の成績の優秀さに関係あるとアメリカの研究者は判断し、最初は

日本の授業研究の実際の実施過程を克明にビデオ記録することからLesson Studyの研究が始まっている。授業研究が再び教師の手に渡り、教師自身による授業研究の基盤を形成することが現代の教育の1つの課題である。日本の教師の手による授業研究を再評価するために、アメリカにおいて展開されているlesson studyに注目したい。

本研究は、授業研究を基礎とした校内研修であるアメリカのLesson Studyが日本の授業研究をどのように受容し、どのように評価しているかを明らかにすることを目的としている。

Lesson Studyは日本語の授業をlessonとして、研究をStudyとして直訳したものである。Lesson Studyは、日本の授業研究を基礎とした校内研修を指している。研究授業の公開とその直後に開催される検討会を中心とした授業研究は、比較的短期（1－2ヶ月）で実施されるので、短期サイクルの授業研究である。それに比べ、日本の大学および小中学校において実施されていた詳細な実践記録（逐語授業記録、観察記録、子どもの作文など）にもとづいて授業を分析する研究は、例えば1学期に実施した授業の記録を逐語記録として整理し、夏期休暇中や冬期休暇中に1日あるいは2日かけて検討するという意味で、中期サイクルの授業研究である。さらに、民間教育団体（例えば、社会科の初志をつらぬく会）において実施されている授業研究は、ある教師が1学期ないし1年実施した授業の単元構想、授業案、授業記録、児童の作品、カルテなどを整理し、それを次の年の夏に多くの教師や研究者が合宿をともなって、3日間にわたって検討する、長期サイクルの授業研究である。本研究では、特別に短期、中期、長期の形容詞をつけない限り、授業研究は短期サイクルの授業研究を指す。また、アメリカの文脈で授業研究を取り上げる場合には、Lesson Studyと記述する。

さらに、学校で実施されている授業研究とは異なり、大学の研究としてなされている子どもの認識や教師の意志決定あるいは談話の分析などの研究は、これまで授業分析、授業研究、談話分析など様々に呼ばれてきた。本論文では大学で研究として行われている授業研究を小中学校でなされている授業研究と区別するために、大学の研究としての授業研究と呼びたい²。

2 研究方法

本研究は、主にアメリカにおけるLesson Studyの文献を資料にして、Lesson Studyが日本の短期サイクルおよび中期サイクルの授業研究の何に注目をし、それをどのように評価しているかを明らかにすることを目的としているので、まず、どのような文献を選択するか、そしてそれをどのような方法で分析するかが問題である。すべてのLesson Studyに関する論文を収集して、それを分析し、いわば帰納的な方法で目的としていることを明らかにするにしても、分析の枠組みを必要とする。そこで、本研究では次の方法をとった。

- 1) 日本の授業研究がアメリカに紹介され、それが多くの教師、学校、州で発展的に実施されてきた歴史を概観することによってLesson Studyを担っている重要な人物を明らかにする。
- 2) これらの重要な人物がどのような他の研究者や実践家と共同研究を実施しているか、その交流を分析し、アメリカのLesson Studyの動向をいくつかのグループに分類する。
- 3) これらのグループの他のグループと比較した相対的な特徴を明らかにする。
- 4) その特徴を背景にして、各論文において、日本の授業研究の何に注目しているかを、できる

だけ、具体的な事例と対応させて明らかにする³。

- 5) 次に注目している事柄に対するアメリカの研究者の評価を明らかにする。ここでの評価は、先ず日本の授業研究に言及している研究者や実践家の評価である。その評価がアメリカの実践をとおしてどのように評価されているかはここでは扱わない。その評価の分析には文化的、教育制度的、社会的問題が関連するので、残された追求すべき重要な課題であり、別な分析枠組みを必要とする。
- 6) 最後にこの評価を、日本における授業研究にとってどのような意味を有するかという視点から、検討したい。

3 アメリカへの日本の授業研究の導入と発展

表1は、Clea Fernandezを中心とするLesson Studyの研究グループのホームページ (<http://www.tc.columbia.edu/lessonstudy/timeline.html>, 17/3/2007) といくつかの論文を参考に、アメリカにおいて日本の授業研究が導入され、展開されていった経過を筆者がまとめたものである。

日本の授業研究を紹介したのは、Makoto Yoshida (吉田誠) である。吉田がシカゴ大学においてJames Stiglerのもとで授業研究をはじめたことが契機となっている。1989年に数学の学習指導について比較研究をしていたStiglerに吉田が日本の授業研究を紹介している。

1991年には、日本のアメリカの授業の違いを比較分析するためにビデオテープに収録された授業を研究するビデオ事例研究 (Videotape-sample study) がStiglerを中心とする研究集団 (ここにはClea Fernandezが加わっている) によって開始されている。吉田は、指導教員のStiglerにLesson Studyをテーマに博士論文を執筆するようにはげまされ、1993年に日本で授業研究のデータを収集している。一方、同年にCatherine Lewisは学校を訪問し、授業を観察しているときに、Lesson Studyのことを耳にしている (Lewis, 1995)。Lewisは1996年に日本を訪問し、約40校の学校を調査し、授業記録を収集するとともに、日本語で教頭や研究主任などにインタビュー調査をしている (Lewis, 2002)。そして、彼女は、1999年にはカルフォルニアの教師と授業研究を開始している。

1999年にはアメリカの人々に日本の授業研究に注目を向けさせる『Teaching Gap』が刊行されている。また吉田は学位論文を完成している。Fernandezはアメリカの日本人学校の教員の協力を得て、授業研究の方法について、アメリカの教員に指導している (Fernandez 2005)。1999年から2000年の間には、公開授業研究が学校、州、国家レベルで開始され、アメリカに授業研究が定着する。2000年2月には、アメリカで公開授業研究、州レベルの授業研究がなされはじめています。パターソン校で吉田とFernandezの協力によって授業研究集会在なされる。おそらくこれがもっとも早期のアメリカにおける授業研究であろう (Wang-Iverson, 200. Yoshida2001, Lewis, 2002)。5月には、コロンビア教育大学の主催でPaterson Schoolで大規模の公開授業研究会が開催され、9月には国家レベルの授業研究が開催されている。

表1 アメリカのLesson Studyの概史

1989年

J. Stiglerは吉田誠より授業研究について情報を得る。

1991年

J. Stigler, Fernandez, 吉田がアメリカと日本の算数・数学の授業をビデオに録画し、比較研究するビデオ事例研究を開始する。

1993年

C. Lewisは授業参観において、授業研究について情報を得る。

吉田が、博士論文執筆のために、日本で授業記録を収集する(1994年まで)。

J. StiglerとJ. HirbertがTIMSSのビデオ研究を開始する。

C. FernandezとJ. Stiglerがカルフォルニア大学ロサンゼルス校の実験学校に授業研究グループを立ち上げる。

1994年

J. StiglerとJ. Hiebertがアメリカ、ドイツ、日本の授業を録画し、データを収集する(1995年まで)。

1995年

J. StiglerとJ. Hiebertがアメリカ、ドイツ、日本の授業記録を比較するためのコードを開発する(1996年まで)。

C. Lewisが日本の教育実践について紹介する。

1996年

C. Lewisが日本の約40校の授業研究を直接に訪問調査をする(2000年まで)。名古屋に滞在し、調査をしている。

1997年

C. Lewis and Tsuchidaの授業研究に関する論文が発表される。

1998年

学術研究雑誌にC. Lewisの論文が発表される。

1999年

C. Lewisがカルフォルニアの教師と授業研究を開始する。

吉田の授業研究に関する博士論文が完成する。

アメリカの授業研究に影響を与えた『ティーチング・ギャップ』が公刊される。

C. Fernandezは、コネチカット州のグリニッジビレッジの日本人学校の12人の教師の協力を得て、アメリカ人に授業研究を教える。

2000年

- 2月：Paterson school # 2 で吉田とC. Fernandezの協力によって授業研究の公開がなされる。おそらくもっとも最初のアメリカにおける授業研究（未確定）。
- 5月：Paterson schoolでコロンビア教育大学の研究集団と協力してアメリカ初の公開授業研究会
- 8月：日米セミナーにおいて数学に関する第1回授業研究会（8月、国立教育研究所）が開催される。
- 9月：州レベルでの最初の授業研究（Delaware）、Bellevue School District, WAで校区レベルでの最初の授業研究。
- 11月：ナショナルレベルでの最初の授業研究：Fernandezと吉田研究集団がコネチカット州のグリニッジビレッジの日本人学校で開催する。

2001年

Lesson Lab開始

日米セミナーにおいて数学に関する第2回授業研究会（10月、アメリカのノースカロライナ州ノースカロライナー理数高校）が開催される。

2002年

C. LewisのLesson studyの本が出版され、多くの人に影響を与える。

日米セミナーにおいて数学に関する第3回授業研究会（4月、横浜国立大学）で開催

3月の段階で、50の研究集団、1000名の教員、200校、60校区、25州に及ぶ。2 Websites

2003年

142の研究集団、1100名の教員、247校、81校区、29州に及ぶ。

2004年

C. Fernandez and Yoshida1920年代と1930年代の問題解決学習が盛んになった大正新教育運動における授業研究について著書を発表する。

2005年

日本とアメリカの共同研究は、2000年に日米セミナーにおいて数学に関する第1回授業研究会（8月、国立教育研究所）が開催されている。以後連続して開催されている。

2000年以降、多くのLesson Studyに関する論文が公表されるとともに、多くの教師がLesson Studyの研究集団に関与している。2000年以降、Lesson Studyに参加している教員、学校、および研究集団が増加し、2004年の段階では、900名がLesson Studyのメンバー、それに関与した教員は2300人であり、150の研究集団、335の学校、125校区となっている。

2000年以降のアメリカの授業研究の展開は、大学の研究者を中心とした研究集団と学校を中心としたネットワーク集団、そしてプロジェクトを基礎とした研究集団が形成されている。表2は授業研究のウェブ・サイト一覧である。

大学の研究者を中心とした研究集団には、

- 1) コロンビア大学教授Clea Fernandezを指導者とするコロンビア授業研究集団（Columbia Lesson Study Research Group）
- 2) ミルズ・カレッジ教授Catherine Lewisを指導者とするミルズカレッジ授業研究集団

- (Lesson Study Group at Mills College)
- 3) James Stigler教授を理論的指導者とし、Joh C. Superを代表者とする授業研究所 (LessonLab)
- 4) パウロ大学 (DePaul University) 教授 Akihiko Takahashiをリーダーとするシカゴ授業研究集団 (Chiago Lesson Study Group)
- 5) Makoto Yoshida教授を会長とするグローバル教育リソース (Global Education Resources) がある。

表2 Websites on Lesson Study

| |
|--|
| <p>California Science Project Lesson Study http://csmmp.ucop.edu/csp/resources/lessonstudy</p> |
| <p>Columbia Lesson Study Research Group at Teachers College, Columbia University www.tc.edu/centers/lessonstudy/</p> |
| <p>On-line website lesson studies in math and science (James Stigler) www.lessonlab.com</p> |
| <p>Research for Better Schools, serving the Mid-Atlantic region, operate the Mid-Atlantic Eisenhower Consortium for Math and Science Education www.rbs.org/lesson_study</p> |
| <p>Lesson Study Research Group (networking resources) www.tc.edu/centers/lessonstudy/</p> |
| <p>Lesson Study Group at Mills College www.lessonresearch.net</p> |
| <p>Lesson Study in Bellevue, Washington schools www.belnet.bellevue.k12.wa.us/lessonstudy.html</p> |
| <p>Lesson Study in Nashville, Tennessee schools www.nashville.k12.tn.us</p> |
| <p>Delaware Lesson Study in Writing Project www.doe.state.de.us/englangarts/lstudy.htm</p> |
| <p>Math Star - Lesson Study videos http://mathstar.nmsu.edu/Movies/LS5/index.html</p> |
| <p>Global Education Resources: www.globaledresources.com</p> |

プロジェクトによる授業研究は

1) カルフォルニア州立大学を基礎としたカルフォルニアサイエンスプロジェクト授業研究 (California Science Project Lesson Study)

2) National Staff Development Council

等がある。

また、特定の学校をベースにした授業研究集団は多く存在している(2004年段階で150の研究集団が形成されている)。

4 授業研究集団とその特徴

グローバル教育リソースは、数学の授業研究に焦点を当てており、日本の小学校1年から6年までの教科書を英語に翻訳紹介している。また自発的な研究授業を公開し、授業研究をアメリカにおいて普及している。この代表者であるMakoto Yoshidaは、日本における授業研究の大掛かりな調査と自分の体験をもとに日本の授業研究を最初にアメリカに紹介した人物であり、授業研究者として最もアメリカで知られた研究者の一人である。

シカゴ授業研究集団の授業研究は、2002年に設立された授業研究集団であり、日本の授業研究をアメリカの移入しようとしている。学校の管理職者がこの集団には参加し、将来教師になる大学の学生を指導している。Akihiko Takahashiは数学教育の分野の授業研究者である。

James Stiglerは、彼の著書『テーチング・ギャップ』の公刊以来、アメリカの授業研究の促進を刺激した研究者である。彼の初期の研究は、数学教育の分野における認知研究(1986)とアメリカ、中国、台湾、日本を比較したカリキュラム研究(1982)、数学の学習研究(1997、1998、1990、1991)であるが、1991年にビデオ研究を開始して以来、彼の研究は、TIMSS(The Third International Mathematics and Science Study)のビデオ研究に重点を移している。ちなみに1998年には、収集したビデオと教材を保管するためのアーカイブであるLessonLabを設立している。このビデオの公開により、教師の専門職性の開発を目指している。Stiglerは、これまでのアメリカの専門職的能開発は、1) 授業実践から切り離されたホテルや大学で実施されていた、2) 教師がどのようなカリキュラムも使用するかを考慮せずに企画されていた、3) 専門職的能開発は子どもにも教師にも効果がなかったと反省的にとらえている(Willis 2002, 6)。教師が指導力を発揮するためには、次の3点を教師は学ぶ必要があるとStiglerはWillisのインタビューに答えている(Willis 2002, 7)。第1点は、教師は自分や他の教師の授業を分析することが必要である。その分析によって教師の学習指導と生徒間の関係を理解することができる。これまでアメリカにおいてはこの分析は専門職能力開発ではなされていなかった。第2点は、新しい学習指導に触れることである。ビデオ研究の調査結果からアメリカの教師の学習指導には多様性がなかったと捉えている。第3点は、授業分析や授業実践の調査によって培われる。教師のいつ、どこで、どのような方法を使用するかという判断力が必要である。学習指導は単純なものではなく複雑なものであり、状況に依存している。

質の高い研修プログラムを生み出すことについて、Stiglerは、「1つの良い例は、Lesson Studyプログラムです。その研修の中で教師は共に学習指導案を作り、その指導案を実施したらどのような結果が得られるかを観察し、何が失敗を招いたかを分析し、新しい発想でそれを改善し、再び自分

のクラスで授業を行なうというものです」(Willis 2002, 7)と答えている。このような方法で専門職的な力量を形成するには、いくつかの前提条件が必要であるが、Stiglerは先ず、専門的に学習してきたことを他の教師と分か合うための全体的な仕組みが必要であり、それによって専門知識を積み上げていくことが必要だとしている。次にそのような共同研究を持続することができる環境を作り上げることが必要であるとしている。そして最後にこれまでアメリカでは伝統的に実施されてこなかった授業の分析をすることが必要だとしている。この前提を生み出す1つの試みがLesson Labである。

Stiglerの多くの研究はTIMSSのビデオ研究であるが、彼の関心の1つは教師が具体的な授業をベースにしてお互いの経験から学び合うことにより培われる教師の専門職的知識の育成にある。

Clea Fernandezを指導者とするコロンビア授業研究集団は、授業研究が授業改善に有効なアプローチであるという認識をもって、その授業研究をアメリカの環境で実施する場合に生じる問題を、具体的な実践を通して明らかにし、授業研究をアメリカの教師が実施できる体制を整えようとしている(Fernandez & Chokshi 2002)。授業研究をアメリカで実施する場合の、具体的アドバイス(授業研究を成功させるためのアドバイス、研究授業を実施するためのアドバイス、授業研究をささえる具体的方法¹⁾)を提案している。この背景には、このグループが、日本人の研究者や教師の協力を得て、日本の授業研究の精神、段階、具体化の手順について、具体的な事例に即して理解していることがある(Fernandez, C.; Cannon, J. & Chokshi, S. 2003)。アメリカの具体的な授業実践の場における授業研究の実施に伴う問題を追求しているところにこのグループの特徴がある。このような追求は、「最終的に教師に自分たちの取組から学ぶことに対する建設的な考え方や研究方法を内面化させること」(Fernandez 2002, 403)である。この内面化された人とはこれまでアメリカで強調されてきた反省的实践家ではないだろうかとFernandezは述べている。

Lewisは、日本研究者であり(土居健郎、キャサリン・ルイス、須賀由紀子、松田義幸 2005)、特に日本の幼児教育の専門家である(Lewis 1995)。彼女の授業研究は日本における多くの実践事例の収集と聞き取り調査にもとづいている。Lewisは、日本の授業研究は日本の教育をどのように変革したのか(Lewis 2002b)、日本の授業研究が成立するのはどのような条件や枠組みがあるのか(Lewis 2002a)、など日本の学校と授業研究を理解しようとしている。Lewisは日本での調査をもとに、授業研究が単なる個人の授業改善ではなく、教育改善であることを次のように述べている。「授業研究は、ただ個人の授業を改善するためのものではない。現在試み中である教育改善の方法を設計するためのものである」(Lewis, Catherine. Perry, Rebecca. Murata, Aki 2003, 21)。StiglerやFernandezと比較して、Lewisの大きな特徴は、子どもの視点から授業研究をとらえようとする姿勢が強い。

Stigler, FernandezそれにLewis等の論文のタイトルの傾向を大まかに分類し、その3つの授業研究集団の特徴を結論として述べると、次のようである。

Stiglerを中心とする授業研究集団の特徴は、教師の専門職的知識の向上のための質の高い研修プログラムとその前提条件を作り出すアーカイブの構築に関心を有しているところにある。

Fernandezを中心とする授業研究集団の特徴は、協働的な教師の実践的力量形成に関心を有しているところにある。

Lewisを中心とする授業研究集団の特徴は、子どもの思考と教師の資質の向上に関心を有しているところにある。

より強調して単純化すれば、Stiglerは研修プログラムに、Fernandezは教師の役割に、Lewisは子どもの活動に、関心の重点がある。

5 アメリカにおける日本の授業研究の関心領域を区分する枠組

アメリカにおける日本の授業研究への関心部分（領域）を区分するために、日本の授業研究のサイクルと段階を区分し、その段階ごとの研究課題を特定したい（図1）。この図においては、外側に配置した楕円は授業研究の段階である。この図では、授業単元と授業案の協同的計画が明確には示されていないが、事前研究に位置づけられている。この図はさらなる改訂を必要としている。この外側の次の円は、授業研究の実践的課題を示している。例えば、実践的課題の例を1つ取り上げると、実践家と研究者のコラボレーションの構築である。内側の四角は、授業研究の理論的課題を示した。この理論的課題は、授業実践から分析の報告までの情報の質の変化を基準にして区分した。例えば、具体的実践とその実践の録画・記録の間には、情報の置き換えがあり、そこには現象学的な問題が生じている。

その図に従って、研究課題領域を羅列すると次の表3のようである。

表3 授業研究における実践的課題と理論的課題

| |
|---|
| I 短期・中期・長期の実践的課題 |
| 1) 研究者と実践家のコラボレーション：研究共同体の構築の可能性と条件 |
| 2) 協同的な授業単元・授業計画の作成：開発される授業計画の様式と同僚の関わり |
| 3) 研究仮説の意識化：これまでの仮説－検証型研究方法と仮説形成の方法の再検討 |
| 4) 授業記録の方法：速記録、座席表、板書、エスノグラフィーノート、ジャーナルなど個性的な記録 |
| 5) 観察力のセンスの育成：授業を見る視点、討議をふかめる観察方法と技術 |
| 6) 事後の資料収集：子どもや教師へのインタビュー内容と方法、子どもの作文や作品、ノートの利用方法 |
| 7) 検討資料の作成：討議のために作成される資料と討議を深めるためのその有効性、総合授業記録の提案 |
| 8) 検討会：討議内容と討議を深める視点、検討会の段階の区分 |
| II 中期的、長期的サイクルの研究にともなう実践的課題 |
| 9) 授業記録の作成様式：逐語授業記録の様式、授業内容のコード化、 |
| 10) 記録の処理方法の開発とその研究 |
| 11) 表現スタイル： |

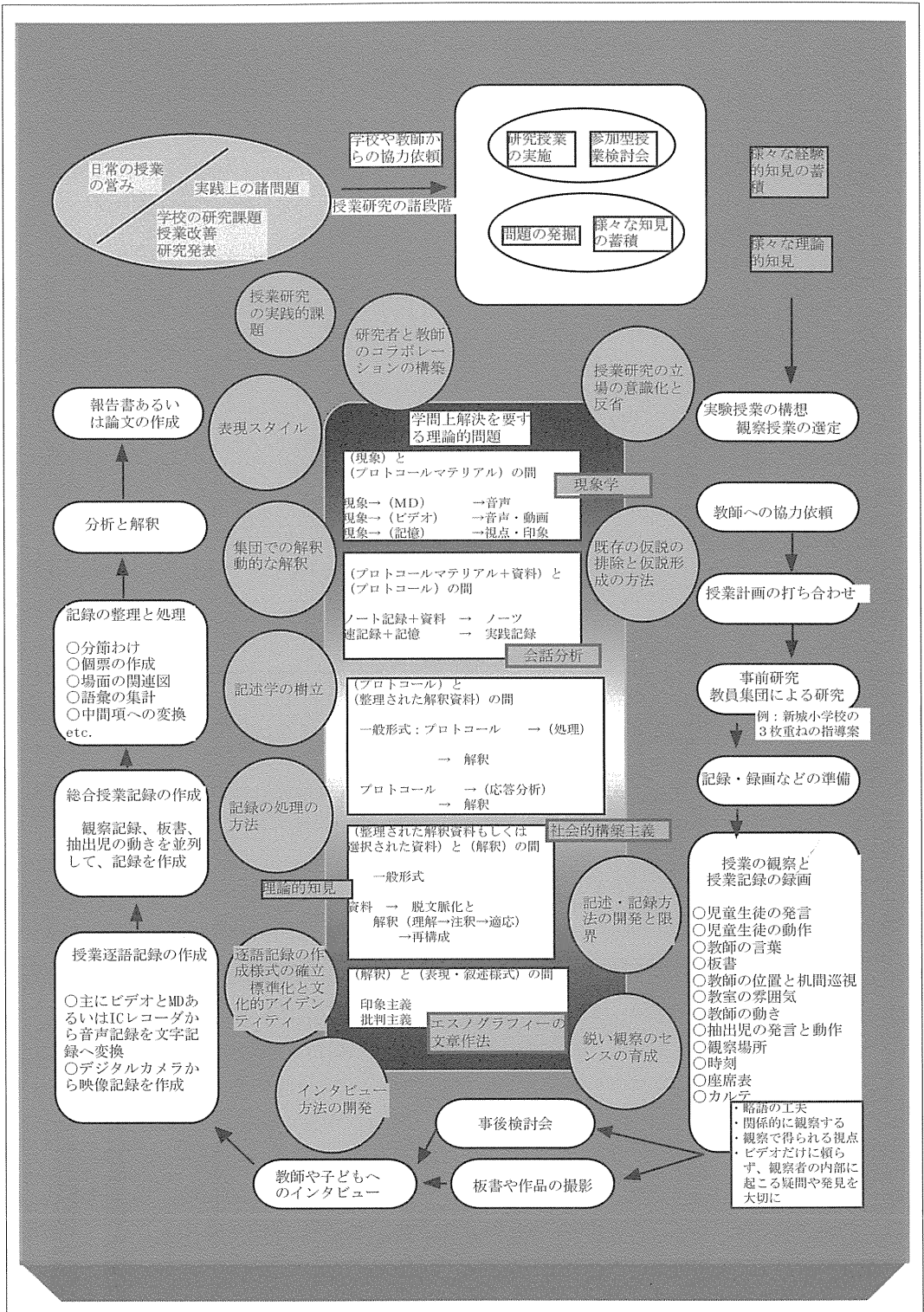


図1 授業研究における研究方法の課題と実践的課題

Ⅲ 制度や体制に関わる実践的課題

- 12) 授業研究を支える学校の組織、体制：授業研究を支える組織的支援体制
- 13) 問題の共有と協同的な解決体制：教師の同僚性の変化、地域の人々、専門家の参加
- 14) 学校の体制と地域との関係：学習する共同体の構築
- 15) 自律した研究あるいは学校運営と国家カリキュラムの規制と緩和

Ⅳ 授業研究の理論的課題

- 16) 授業現象をどのようなマテリアルで記録／保存／定着するかという問題とそれに伴う現象学的な解明。関連する研究領域：現象学
- 17) ノーツ、実践記録、言語逐語記録、表現や活動の記録、長期の記録、教師の実践あるいは反省記録、評定式質問、インタビューなど、プロトコルマテリアルをプロトコルに変換するルールの明確化と変換過程で生じる情報の質の変化に関する研究。多角的な記録方法（例：ドイツの事後反省記録）。関連する研究領域：会話分析、ラオフヒストリー研究、エスノグラフィー
- 18) 応答分析、語彙頻度分析、クラスター分析、分節間分析、などプロトコルの処理と記述に関わる問題。授業研究分野における記述学の確立の必要性。関連する研究領域：統計学、心理学、社会学
- 19) 整理された資料を解釈し、再構成する場合に関わる解釈学的問題の解明
関連する研究領域：解釈学、社会的構築主義（共同で解釈するときに用いられる言語の問題）
- 20) 解釈の結果をどのように表現するといった叙述あるいは表現様式の問題
関連する研究領域：エスノグラフィーの文章作法

Ⅴ 授業研究の研究とその応用

- 21) 授業研究の比較研究：多国間比較、クロスカルチャルな研究、普及研究など
- 22) 授業研究によるカリキュラム、教科書、教材開発など開発研究
- 23) 教員養成における授業研究：教育実習、メンター、研究実習
- 24) 授業研究の研究方法论：授業分析、構築主義的解釈、ディスコース分析など。

6 アメリカにおける授業研究集団の日本の授業研究への関心

上に述べた枠組にもとづいて、アメリカの研究者が日本の授業研究のどのようなところに注目し、どのように評価しているか、述べたいと思う。

(1) 研究者と実践家のコラボレーション

アメリカ、イギリス、オーストラリアなど諸外国では大学と学校のパートナーシップの問題を扱った論文は多くみられる（Sarkar Arani 2007、Matoba 2007）。それに比較し、大学の教員個人と学校との協力は多くみられるが（上田薫・安東小学校、佐藤学）、日本における大学と学校との組織的連携に関する論文はすくない（名古屋大学・東海市教育委員会、田中耕二、福井大学）。

大学の研究者と実践家のコラボレーションについて、Lesson StudyをリードしているFernandez, Lewis, Stigler, Yoshida, 等を中心としたコラボレーションが見られる。

日本人学校の教師とアメリカの教師が授業研究に関してコラボレーションをした事例がある。1999年から2000年にかけて、アメリカの教師は、日本人学校の教師12人を募集し、授業研究についてアドバイスを受けている。この様子は、Fernandez研究集団によって、記録され、主に5、6学年の算数（三角形）の研究授業を素材として、その成果が公刊されている（Fernandez 2003）。日本人教師のアメリカ人教師に与えたアドバイスが、1）これまでの指導と将来の学びを考慮して研究授業のトピックを選択する、あるいは授業内容の順序性を考える⁵というようなカリキュラム作成

者の目（レンズ）で授業を計画し、見ること、2）子どもの目（レンズ）でみること、として整理されている。

日本における授業研究の課題としては、1）研究者個人と学校あるいは特定の教師のパートナーシップ（one way, one-on-one）の利点と問題点の把握、2）大学と学校の組織的なパートナーシップの構築、3）相互に成長する互惠関係のあるプロジェクト型の共同研究関係の構築と推進がある。

（2）協同的な単元計画と授業案作成

Stiglerは、授業研究の重要な要素は協同的な取り組みであると捉えている。協同で授業研究に取り組むことによって、1）分析する共通の言語を育て、2）学習指導を相互に教え合うことを可能にする、3）自分の授業を改善する心底からの動機付けを生み出す⁶、そして4）学習指導が教師の合作的過程であると述べている（Stigler1999,116-117）。授業案を協同で作成することは、確かに授業はある一人の教師が行うが、そこで生じた問題は「この授業研究班が設計した授業にあり、授業を演じた教師にはないというのが通常」（Stigler 1999,117）であると捉えられている。

日本における課題としては、1）研究授業を実施する教師の決定と協同的な作業の関係の構築、2）例えば授業案を実施する教師、協同での検討、そして再び実施する教師という三段重ねの授業案作成の段階など協同的な授業案作成体制の構築、3）協同的授業案作成が後の授業観察と協議内容とその質にもたらす影響の研究などがある。

（3）指導案の様式

フェルナンデスグループは、授業研究の包括的な目標設定や授業研究を円滑に行うための体制づくりなどの提案から一歩進めて、授業を実施するための具体的戦略を明らかにしている。そこでは、授業案の様式、効果的な討議時間の持ち方、協働的な授業計画、研究授業の観察方法と、データ収集のツールの作成、有意義なフィードバックの方法等日本の授業研究の手法が具体的に提案されている（Fernandez, Cannon, Chokshi, 2003）。

授業案の様式をみると、1）授業段階、2）生徒の反応、3）教師の留意点、4）評価方法のカラムで構成されていると把握している。

教授活動を記述する形式について、Ferenandez研究授業集団は次のように理解している。

「授業活動を記述するのに、日本の教師たちは、4行チャートを用いる。1つ目のカラムには、教師たちが計画している授業の順序やキーとなる課題である“授業の段階”のアウトラインを記す。2目目のカラムには、教師たちが授業の各段階で期待している、児童・生徒の回答や反応の予測を記す。3目目のカラムには、その児童・生徒の反応の扱い方をリストで挙げる（例えば、どんなコメントをするのか、どんな質問を返してくるのか、あるいはどのように授業中に子どもたちに考えてもらいたい考えを反応と関連付けようとするのか）。この3つ目のカラムには、教師の覚書として要点一覧で記す。・・・(中略)・・・4つ目のカラムには、授業の中で各段階の成果を測定するための評価方法についてリストで挙げている。例えば、もし授業の最初の5分は、授業で子どもに動機づけたり子どもの注意を引いたりするために設計されているならば、4つ目のカラムは、授業の各分節が目標に達しているかどうかの評価のためのアイディアを示唆している。」

日本における課題としては、日本における多様な授業計画案を検討し、直線型指導案からの脱却する必要がある。例えば、愛知県新城市立新城小学校の複線型指導案や安東小学校における座制指導案 (Matoba, 2006) の意味を問う必要がある。

(4) 授業の観察の方法

日本の教師は、テスト、記録、そしてビデオから収集できないデータ、例えば小集団での話し合い、つぶやき、関心の程度などを収集し、子どもの学びや態度を全体的に観察していることに注目している (Lewis, 2002, 9-11)。このことは授業研究の特徴の1つが子どもを見る目 (The Eyes to See Students) であると捉えるLewisの考えと関係する。

もう一つの焦点は、観察した事柄をどのように記録するかという手法の開発である。研究授業における観察記録の方法が論文化されている (Frank 2004)。

日本の学校を訪問し、実際の日本における研究授業とその後の検討会に参加し、観察したLewisは、参加した教師たちが特定の開発されたツールも学んでいることを報告している。例えば、名前をマグネットに書き、それを黒板に貼ることで、1) 授業の変わり目や子どもの意見の形跡を残すことができる、2) 子どもが自分の意見を確認できる、とう利点をもつと感じている (Lewis 2002, 19)。

日本における課題としては、1) 座席表、観察ノート、カルテなど日本の観察記録の手法のもつ授業改善への有効性を検討する必要がある。2) 第2に、授業研究の文脈でいえば、鋭い観察力の育成と観察方法の関連の検討がある。多くの観察事項から重要な観察事項を選択する (選択による重要なポイントや視点の絞り込み) ことや真剣な討議の場での他者の観察視点による自分の視点の見直しによって、より観察力が高まる可能性がある。

(5) 討議資料の作成

アメリカの授業研究者は、日本の校内研修の様子についてよく調査をしている。討議資料については、指導案、付箋紙に記入したメモ、板書記録 (時には板書記録を転記する手間を省くために、黒板ではなく模造紙に書くことを勧めている) である。東京のある小学校において実施された4年生理科太陽エネルギーの校内研修を参観したLewisは、検討会の様子を次のように報告している。

「私たちは4年生の太陽エネルギーに関する研究授業を観察した。最新の学習指導要領改訂版の中で、電気の学習として付け加えられた新しいトピックである。この授業中、校長、副校長、全ての教師、そして、外部の助言者が、教室の後ろや横から授業を観察した。数名の教師は、クリップボードを持って教師と児童の間で交わされる全ての発言を記録した。授業全体をビデオテープで記録する教師もいた。残りの教師は、付箋紙にコメントを書いた。それらは、後に、テーマによって組織化され、参加者全員のためにコピーされた。」 (Lewis 2004)

速記録の活用については、まだアメリカにおいて報告された論文を見いだしていないが日本における課題としては、1) 研修の場における権力関係を考慮し、参加者が意見を自由に述べるができるシステムを構築する必要がある。速記録は逐語記録の約30%の内容を記録している。しかしながらそれでも、述べられている意見の根拠を共有でき、事実にもとづく発言ができる。第2は、

観察記録など、発言がなければ、個人の内部にしまわれ、共有化されない記録をどのように活用するか、例えば総合授業記録をどのように作成するかが実践的な課題である。

(6) 検討会の内容 1 短期の目標と長期の目標の結合

1997年以来実施してきた日本の教師たちへのインタビュー調査を整理したLewis等の最近の研究(Lewis, Perry & Hurs 2004)によると、授業を改善するためには、1) 教材についての知識、2) 教授についての知識、3) 生徒を観察するための能力、4) 教職員間のネットワーク、5) 日常の実践と長期の目標と関連、6) 動機と効果があったという感覚、7) 利用できる授業計画の質、を強化、あるいは増強することが鍵であることを明らかにしている。その中で、特に5) 日常の実践と長期の目標と関連に注目をしたい。

アメリカ合衆国の教育者たちは日本でなされる授業研究はいろいろな意味を含んだ問いが出発点となっていることに驚いている。つまり、「私たち先生が自分の生徒たちにどのような人間になってもらいたいのか、というような問いかけ」(Lewis, C.; Perry, R. & Hurd, J., 2004) など、生徒たちの時間をかけて達成すべき目標に日本の教師は授業分析の中で取り組んでいる。

同じことをLewisは、日本の授業研究の本質的な特徴として、長期の目標が教師の間で共有され分かれていてるところにみている(Lewis, 2002, 7)。具体的には、「子どもの基礎的能力を保障し子どもの個性を育成し、彼ら個々の要求に合う教授指導を展開する」目標と同時に、「子どもにとって友好関係と学びが同時に喜びとなる」目標を実現しようとしている(Lewis, 2002, 7)。基礎的能力というその授業で達成される目標と個性や個々の要求へ合わせるという長期の教育で達成される目標が結合し、その長期の目標が共有されている。

アメリカの場合には、短期の目標を中心に追求する、つまり、具体的な概念、測定できる結果に目標が焦点づけられている。

それでは、長期の目標を重視することは、どのような評価をえているのだろうか。Lewisは、1つには、「生徒の学びの中に存在し、しかし、学校のすりきれた日常のなかでは忘れ去られている学びを愛することと他者と仲良くやっていく能力というような」(Lewis, 2002, 14) 質的なものを心に刻むことを可能にすると述べている。第2には、「教師がアカデミックな発展と社会的発展の両方を育む授業方法を発見できる」(Lewis, 2002. 14) 点にある。日本の授業研究において軽視されてきた視点である。

(7) 検討会の内容 2 研究授業の内容がアカデミックでない領域も選択される。

アメリカの授業研究では、数学や語学が研究授業の教材に選択されるが、日本の場合には、美術、音楽、学級会などの領域も選択されているところに、Lewisは日本の授業研究の特色をみている。日本の教師は、「子どもの学びが弱いところを研究対象にしている。教師が教えることが難しいと思っている教科を選択する。最近変化してきた教科、例えば、新しい内容、技術、授業の取り組みが提唱されている教科を選択する。」(Lewis, 2002, 9) と見ている。

Lewisは、研究授業をとおして、日本の教師は、他の教師がどのように授業計画を立案し、どのように教えるかを学ぶ機会になっているし、また、例えば、太陽電池の例のように、この内容が学

習指導要領に加わった意味を、お互いに、そして招いた科学者や理科教育学者から学ぶ機会になっているという (Lewis, 2002, 15)。

(8) 検討会の内容 3 教師の評価ではなく、子どもの学びに焦点をあてた授業研究

Lewisは「日本における究極の授業研究の焦点は、子どもの学びと成長にあるようである。」(Lewis, 2002, 9) と日本の授業研究の特徴を述べているが、授業観察における証拠ないしデータの収集もそこに焦点が当てられている。

「日本の教師は、子どもの学び、参加、他の子どもの扱い方に関する証拠を集める。例えば、子どもは小グループでどのように活動したのか、電気について子どもの考えは授業の進行のなかで変容したのかどうか、子どもたちは興味や刺激を見せたのかどうか、証拠を集める。」(Lewis, 2002, 9)

子どもの視線で見る、すなわち授業研究を通して、日本の教師は「子どもを見る目」を養うことができる。

(9) 討議内容 4 対立した意見

Lewis (1998) は、「研究授業は教師たちに問題を提起し、討議し、教育の到達点や展望について対立している意見を調和させる機会を与える」(16) と述べる。振り子の研究授業の後、次のような討議が起きた。

次ぎの例は、対立した意見の例である (Lewis 1998, 16)。

「主催者側の教師：近年の科学教育の中で私たちが感じていることは、その過程を過度に強調するあまり、効果や結果がなおざりになっていることである。あなたたちが子どもたちの知識を喚起したいという結論は、このごろはなりをひそめてしまっている。子どもたちが活気に満ちているからといって、どうして良い授業だと言えるのか？」

来校した教師：もし子どもたちが日常生活と関連づけることができるのであれば、それは科学と言ってよいのではないか。(国の科学に対する指針を引用したものを読む)

主催者側の教師：どんな種類でも体験だけでは科学とみなされるわけではない。もし子どもたちが、質量は振り子の振幅の違いを生むという考えから出発してしまったとしたら、本日行われた科学的プロセスは何か不具合が生じていることになりはしないか。

来校した教師：子どもたちが正しい答えを得れば科学的な推論であり、正しい答えをえなければ科学的な推論ではないというのですか。科学的な思考はいつ突然に非科学的になってしまうのですか。」

(10) 授業研究の要素と段階

授業研究がどのような要素で成り立っている。例えば、Lewis (1988, 12-14) は、1) 他の教師によって観察される、2) 1, 2名の同僚と協力して授業計画が立案される、3) 特定のテーマ

に焦点を当てて研究授業がなされる、4) 研究授業は記録される、5) 討議される、というように1988年段階では理解している。

Stiglerは、日本の授業研究の段階を次の7段階として捉えている：第1段階) 問題の明確化、第2段階) 学習指導案の立案、第3段階) 事前授業研究、第4段階) 授業評価と反省、第5段階) 授業の改訂、第6段階) 校内授業研究(研究授業)再度の授業評価と反省、第7段階) 結果の共有(Stigler, 1999, 108-111)。

日本のある小学校(1学年2学級)の授業研究は、次の9段階となっている。第1段階：昨年度の反省と年間の研修計画、第2段階：各学年の授業参観交流、第3段階：先行授業の授業計画、第4段階：先行授業の実施、第5段階：先行授業の事後検討会、第6段階：提案授業の授業計画、第7段階：提案授業の実施、第8段階：事後検討会、第9段階：研修の見直し、第4段階の先行授業の実施が可能な学校は、1学年複数学級である。小規模校での授業研究の効果的な段階の研究が課題である。

7 制度や体制に関わる実践的課題

(1) メンターの機能と知見の蓄積

日本の教師がその生涯において開発し展開した授業計画や実践は、残された教師に受け継がれて行っている(Lewis, 2002, 6)。

日本の年長者のもつ授業研究におけるメンターの機能の研究が課題である。

(2) 同僚的な学びをする能力の構築

学習する組織は、Senge, P. M. (1990) によって提唱された企業の経営学の概念である。この概念は、教育学へ応用されてきた。そして、学校は、学習する組織、学習する共同体として構想され、展開されてきた(Wallace, R. C. Engel, D. E. & Mooney, J. E. 1997; Roberts, S. M. & Pruitt, E. Z. 2003)。日本においても、学びの共同体として理論的にもまた実践的にも展開されてきた(佐藤、1997：佐藤、2000：佐藤、2001：大瀬、佐藤、2000：佐藤、佐藤、2003：佐伯、1995：佐伯、1996)。

協同的な授業研究を促進／支援する体制づくりがなされている。学校を学習する組織あるいは継続的な学校文化の継承と革新という視点から見ると、授業研究が単に教師の力量形成に有効であるだけでなく、学校の文化の伝統と革新に授業研究が果たす役割について解明できる可能性がある。

8 授業研究の方法と方法論

(1) 授業研究における比較社会文化研究

TIMSSに伴って調査された日本、ドイツ、アメリカの授業実践の比較分析(Stigler, W. & Hiebert, J. 1999) によって、日本の授業と授業研究が注目された。そこでは、日本の授業の特徴は子ども中心であり、それに比較して、アメリカの授業の特徴は教材中心であり、ドイツの授業の特徴は教師中心であると、分類されている。

Stiglerらは、「人々はある一つの文化内において学習指導とは何かに関する心象、イメージを共有」(Stigler, Hilbert, 1998, 2：1999, 89) している。この心象を彼等は台本(scripts)と呼び、台

本は基本型の心的モデルであるという。日本の授業は、問題解決がまずあり、生徒は、自身もしくは小集団で発見した問題を解き、解法の考案と方法の理解を強調している。ドイツとアメリカの授業は、教師の提出した例題もしくは問題を解く。そして、教師が指導する (Stigler, Hilbert, 1999,)。この学習指導に関するアメリカの文化の台本を改善するために、彼等は日本の授業研究に注目し、その分析から得られた六つの原則 (持続的・漸進的・微小増加的改善であること、児童・生徒の学習目標に常に焦点を当てること、教師にではなく学習指導に焦点を当てること、授業の場において改善すること、改善を教師の仕事とすること、実体験から学びえる仕組みを構築すること) を提案している (Stigler, Hilbert, 1999, 125-129)。

評価と課題：Stiglerの比較研究は、学習指導の基本的相違を台本の視点から研究したもので、授業研究の比較社会文化の研究である。教育社会学からすれば、学級というミクロな分野の研究である。授業研究の視点からみると、授業研究の比較社会文化の視点からの研究が構想されて、一定の成果を上げている。日本においては、授業研究という視点からではないが、恒吉や渡辺 (2005) の納得や叙述の研究においては一定の成果があり、日本の授業研究において今後において研究を期待したい分野である。また、算数・数学の授業研究においては、台本に関する論文がすでに現れている。

この研究は、学習する組織でよく言われる日本の教師がもつ授業に関するメンタルモデルを解明する萌芽がある。Stiglerは、このメンタルモデルを改革するために、授業研究の6の原則を提案しているが、日本においても、単なる技能や技術の改善と資質の向上だけでなく、メンタルモデルをどのように改革するが、その知見を明らかにする必要がある。

(2) 授業研究の研究

教師のポートフォリオ (teacher portfolios) や教師の日々の実践を書き記した他の事例集を利用することを中心に置く専門職的能力開発を構築する方法を探る先駆的な取組 (Boehrer & Linsky, 1990; Lyons, 1998)。どのように教師が生徒の活動を検討し、学ぶ努力 (Seidel, 1998)。学習指導の経験の実例から教師が研究し、学ぶのに役立つビデオテープや他のハイパーメディアツールの利用の探求 (Lampert & Ball, 1998; Rowley & Hart, 2000; Seago, 2000年)。

(3) 授業研究を成立させる条件の分析

授業研究を可能にしている条件の第1は、簡素な学習指導要領 (国家カリキュラム)、簡略な教科書と当てられる授業時間の多さにある。TIMSS (第3回国際数学・理科教育調査) の報告では、日本での8学年の理科の教科書は、8つの単元からであり、アメリカの8学年の教科書の65より平均的に少ない (Schmidt et al, 1997)。アメリカと世界の標準からすると、日本のカリキュラムは簡素化されている。それが、授業研究に取り組む支援となっている (Lewis, 2002)。

第2の条件は、教師間の協同が日常的になされていることである。それをささえている文化は、才能ではなく努力によって成功がもたらされるという考えが子どもだけでなく教師にもあり、「教師もまた、一生懸命努力すれば、自らの教授は向上するだろうと信じている」 (Lewis 1998, 50)。また「日本の両親は、教師が研究授業を討議するために会合を開いたり、他校の研究授業に参加する

ときは、子どもたちが早く帰宅すると考えている。」(51) というように、教師の専門性の向上を父母が支援している。

第3の条件は、「日本の学校で自己批判的反省、学びが強調され、高く評価されている」(Lewis, 1995; Rohlen, 1976, P128) ことである。

第4は、教育政策が安定していることである。政策の修正ないし転換があると、教師はその修正に時間がかかる。政策の修正のサイクルを長くすることによって、授業研究に専念できる。

(4) 研究のアプローチ

授業研究を研究するアプローチには、1) ディスコース分析、2) アクションリサーチ、3) 授業分析、4) 批判分析、など現在研究が展開されている。しかし、教師が研究者として、研究者そのものとして実践を分析・研究する方向が模索される必要がある。

*本論文は、第41回日本教育方法学会における課題研究での発表原稿と日本教育方法学会主催研究集会(2006年3月、名古屋大学)での原稿に、加筆したものである。

【引用・参考文献】

秋田喜代美(2006)『授業研究と談話分析』財団法人放送大学教育振興会。

馬場四郎編(1965)『授業の探求』明治図書。

Battistich, Victor. Watson, Marilyn. Solomon, Daniel. Lewis, Catherine. Schaps, Eric(1999). "Beyond the Three R's: A Broader Agenda for School Reform". *Elementary School Journal* 99, 5: 415-32.

Crittenden, W. F.(2004). "A social learning theory of cross-functional case Education." *Journal of Business Research*, 58: 960-966.

Chao, Shaw-Jing; Stigler, James W.; Woodward, J. Arthur(2000). "The Effects of Physical Materials on Kindergartners' Learning of Number Concepts." *Cognition and Instruction*, 18, 3: 285-316.

Chokshi, S.; Fernandez, C.(2004). "Challenges to Importing Japanese Lesson Study: Concerns, Misconceptions, and Nuances/" *Phi Delta Kappan*, March 2004, 85, 7: 520-525.

Chokshi, Sonal; Fernandez, Clea(2005). "Reaping the Systemic Benefits of Lesson Study." *Phi Delta Kappan*, v86 n9, May 2005: 674.

Chokshi, Sonal; Fernandez, Clea(2004). "Challenges to Importing Japanese Lesson Study: Concerns, Misconceptions, and Nuances." *Phi Delta Kappan*, 85,7, Mar 2004: 520.

Chokshi, Sonal M.(2002). "Impact of Lesson Study: Report for the NAS/ National Research Council Board on International and Comparative Studies in Education." Draft Report.

Darling-Hammond, L. & McLaughlin, M. L.(1995). "Policies that Support Professional Development in an Era of Reform." *Phi Delta Kappan*, 76, 8:587-604.

Dean, J.(1991). *Professional Development in School*. Philadelphia: Open University Press.

- 土居健郎、キャサリン・ルイス、須賀由紀子、松田義幸（2005）『甘えと教育と日本文化』PHP 研究所。
- Fernandez, Clea(2005). "Lesson Study: A Means for Elementary Teachers to Develop the Knowledge of Mathematics Needed for Reform-Minded Teaching?" *Mathematical Thinking & Learning: An International Journal*, 7, 4 2005: 265-289.
- Fernandez, Clea(2002). "Learning from Japanese Approaches to Professional Development: The Case of Lesson Study." *Journal of Teacher Education*, 53, 5, Nov-Dec 2002: 393-405.
- Fernandez, Clea; Cannon, Joannal(2005). "What Japanese and U.S. Teachers Think About when Constructing Mathematics Lessons: A Preliminary Investigation." *Elementary School Journal*, 105,5, May 2005: 481.
- Fernandez, C. & Yoshida, M.(2004) *Lesson Study: A Japanese Approach to Improving Mathematics Teaching and Learning*. USA: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fernandez, C.; Cannon, J. & Chokshi, S.(2003). "A U.S. – Japan Lesson Study Collaboration Reveals Critical Lenses for Examining Practice." *Journal of Teaching and Teacher Education*, 19, 2: 171-185.
- Fernandez, C. & Chokshi, S.(2002). "A Practical Guide to Translating Lesson Study for a U.S. Setting." *Phi Delta Kappan*, 84, 2: 128-134.
- Frank, C. R., Uy, F. L.(2004). "Ethnography for teacher education". *Journal of Teacher Education*, 55,33:269-283.
- 深谷圭旦（2005）「明治末期における鹿児島県師範学校附属小学校の自習法研究」『教育方法学研究』31巻。
- Givvin, K. B., Hiebert, J., Jacobs, J., Hollingsworth, H., & Gallimore, R.(2005). Are there national patterns of teaching? Evidence from the TIMSS 1999 Video Study. *Comparative Education Review*, 49,3: 311-343.
- Graves, N. J.(1990). "Thinking and Research on Teacher Education." in Norman J. Graves(Ed.), *Initial Teacher Education-Policies and Progress*, London: Kogan Page, 58-73.
- 橋本美吉彦、坪田耕三、池田敏和（2003）『今、なぜ授業研究か』東洋館出版社。
- Hiebert, James; Stigler, James W.; Jacobs, Jennifer K.; Givvin, Karen Bogard; Garnier, Helen; Smith, Margaret; Hollingsworth, Hilary; Manaster, Alfred; Wearne, Diana; Gallimore, Ronald(2005a) "Mathematics Teaching in the United States Today (and Tomorrow): Results from the TIMSS 1999 Video Study." *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 27,2 Sum 2005: 111-132.
- Hiebert, J., Stigler, J., Jacobs, J., Givvin, K. B., Garnier, H., Smith, M., Hollingsworth, H., Manaster, A., Wearne, D., & Gallimore, R.(2005b). "Mathematics teaching in the United States today (and tomorrow): Results from the TIMSS 1999 Video Study." *Educational Evaluation and Policy Analysis*, 27, 111-132.
- Hiebert, James; Stigler, James W.(2004a). "A World of Difference: Classrooms Abroad Provide

- Lessons in Teaching Math and Science.” *Journal of Staff Development*, 25, 4 Fall 2004 :10-15
- Hiebert, James; Stigler, James W. (2004b). “Improving Mathematics Teaching.” *Educational Leadership*, 61,5 Feb 2004: 12.
- Hiebert, J., Gallimore, R., & Stigler, J.(2003a). New heroes of the teaching profession. *Education Week*, 23,10: 56.
- Hiebert, J., Gallimore, R., Garnier, H., Givvin, K. B., Hollingsworth, H., Jacobs, J., Chui, A. M.-Y., Wearne, D., Smith, M., Kersting, N., Manaster, A., Tseng, E., Etterbeek, W., Manaster, C., Gonzales, P., & Stigler, J. W.(2003b). “Understanding and improving mathematics teaching: Highlights from the TIMSS 1999 Video Study.” *Phi Delta Kappan*, 84 ,10: 768-775.
- Hiebert, J., Gallimore, R., Garnier, H., Givvin, K. B., Hollingsworth, H., Jacobs, J., Chui, A. M., Wearne, D., Smith, M., Kersting, N., Manaster, A., Tseng, E., Etterbeek, W., Manaster, C., Gonzales, P., & Stigler, J.(2003c). *Teaching Mathematics in Seven Countries: Results from the TIMSS 1999 Video Study*. NCES(2003-013), U.S. Department of Education. Washington, DC: National Center for Education Statistics.
- Hiebert, James; Gallimore, Ronald; Stigler, James W.(2002). “A Knowledge Base for the Teaching Profession: What Would It Look Like and How Can We Get One?” *Educational Researcher*, 31,5 Jun-Jul 2002:3-15.
- Hiebert, J., & Stigler, J.(2000a). “A proposal for improving classroom teaching: Lessons from the TIMSS Video Study.” *Elementary School Journal*, 101,1: 3-20.
- Hiebert, James; Stigler, James W.(2000b). “A Proposal for Improving Classroom Teaching: Lessons from the TIMSS Video Study.”, *Elementary School Journal*, 101,1 Sep 2000: 3-20.
- Hollingsworth, H., Lokan, J., & McCrae(2003). *Teaching mathematics in Australia: Results from the TIMSS 1999 Video Study*. Camberwell, Victoria: Australian Council for Educational Research.
- 稲垣忠彦 (1995) 『明治教授理論史研究－公教育教授定型の形成』 評論社；増補版。
- Jacobs, J., Hiebert, J., Givvin, K., Hollingsworth, H., Garnier, H., Wearne, D.(2006). Does eighth-grade mathematics teaching in the United States align with the NCTM Standards? Results from the TIMSS 1995 and 1999 Video Studies, *Journal for Research in Mathematics Education* 37(1), 5-32.
- Jacobs, J., Garnier, H., Gallimore, R., Hollingsworth, H., Givvin, K. B., Rust, K., Kawanaka, T., Smith, M., Wearne, D., Manaster, A., Etterbeek, W., Hiebert, J., & Stigler, J.(2003). *TIMSS 1999 Video Study Technical Report: Volume 1: Mathematics Study*. U.S. Department of Education. Washington, DC: National Center for Education Statistics.
- Jacobs, J., Kawanaka, T., & Stigler, J.(1999). “Integrating qualitative and quantitative approaches to the analysis of video data on classroom teaching.” *International Journal of Educational Research*, 31: 717-724.

木原健太郎編著 (1992) 『キーワードで綴る戦後授業研究論争史』 明治図書。

- Kawanaka, T., & Stigler, J. W.(1999). Teachers' use of questions in eighth-grade mathematics classrooms in Germany, Japan, and the United States. *Mathematical Thinking and Learning*, 1(4), 255-278
- Kuhn, H. W., Massing, P.(Hrsg.) (1999). *Politikunterricht, Kategorial + handlungsorientiert. Ein Videobuch*. Schwalbach/Ts: Wochenschau.
- Levin, B. B. & Rock, T. C. (2003). "The Effects of Collaborative Action Research on Preservice and Experienced Teacher Partners in Professional Development Schools." *Journal of Teacher Education*, 54, 2:135-149.
- Lewis, & Perry, R.(2006). "Professional development through lesson study: Progress and challenges in the U.S." *Tsukuba Journal of Educational Study in Mathematics*, 25, University of Tsukuba, Japan.
- Lewis, C.(2002a). *Lesson study: A handbook of teacher-led instructional change*. Philadelphia, PA: Research for Better Schools.
- Lewis, Catherine(2002b). "Everywhere I Looked: Levers and Pendulums.", *Journal of Staff Development*, 23 ,3 Sum 2002: 59-65.
- Lewis, C.(2002c). "Does Lesson Study Have a Future in The United States?" *Nagoya Journal of Education and Human Development*, The Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, 1: 1-23.
- Lewis, Catherine(2000). "Lesson Study: The Core of Japanese Professional Development, Paper presented at the Annual Meeting of the American." *Educational Research Association* (New Orleans, LA, April 24-28, 2000).
- Lewis, Catherine. Perry, Rebecca. Hurd, Jacqueline. O'Connell,(2006). "Mary Pat. Lesson Study Comes of Age in North America." *Phi Delta Kappan*: 88,4 Dec 2006: 273-281.
- Lewis, Catherine. Perry, Rebecca. Murata, Aki(2006). "How Should Research Contribute to Instructional Improvement? The Case of Lesson Study." *Educational Researcher*, 35,3 Apr 2006: 3-14.
- Lewis, C.; Perry, R. & Hurd, J.(2004). "A Deeper Look at Lesson Study." *Journal of Educational Leadership*, 61,5 February 2004:18-22.
- Lewis, Catherine. Perry, Rebecca. Murata, Aki(2003). "Lesson Study and Teachers Knowledge Development: Collaborative Critique of a Research Model and Methods." Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association (Chicago, IL, April 21-25, 2003).
- Lewis, Catherine . Tsuchida, Ineko(1998). "A Lesson Is like a Swiftly Flowing River: How Research Lessons Improve Japanese Education." *American Educator*. 22 , 4 :12-17,50-52.
- Lewis, Catherine(1995). *Educating Hearts and Minds: Reflections on Japanese Preschool and Elementary Education*. Cambridge University Press, 256.

- Lewis, Catherine C(1995). "The Roots of Japanese Educational Achievement: Helping Children Develop Bonds to School." *Educational Policy*, 9, 2:129-51.
- Lieberman, A.(1995). "Practices that Support Teacher Development: Transforming Conceptions of Professional Learning." *Phi Delta Kappan*, 76, 8:591-596.
- Linn, Marcia C.; Lewis, Catherine; Tsuchida, Ineko; Songer, Nancy Butler(2000). "Beyond Fourth-Grade Science: Why Do U.S. and Japanese Students Diverge?" *Educational Researcher*, 29,3 Apr 2000: 4-14
- Loo, M.L., Pong, W.Y., Marton, F., Leung, A., Ko, P.Y., Ng, F.P., Pang M.F., Chik, P.M.P., Chan,S.S.F., Tang, N.C.A.(2002). *Catering for Individual Differences Building on Variation (The first findings)*. Hong Kong: INSTEP, Faculty of Education, The University of Hong Kong.
- Marcia C. Lewis, Catherine. Tsuchida, Ineko. Songer, Nancy Butler(2000). "Beyond Fourth-Grade Science: Why Do U.S. and Japanese Students Diverge?" *Educational Researcher*, 29,3: 4-14.
- 的場正美 (2005) 「世界における授業研究の動向」日本教育方法学会編『教育方法34 現代の教育課程改革と授業論の探求』図書文化。
- Matoba,Masami, Keith Krawford, and Mohammad Reza Sarkar Arani (eds.) (2006a) *Lesson Study: International Perspective on Policy and Practice*, Beijing: Educational Science Publishing House, 257p.
- Matoba, M. & Sarkar Arani, M. R.(2006a). "Ethnography for Teachers' Professional Development: Japanese Approach of Investigation on Classroom Activities", in N. Popov, C. Wolhuter, C. Heller & M. Kysilka(Eds.), *Comparative Education and Teacher Training* (116-125), Vol.4, Sofia: Bulgarian Comparative Education Society.
- Matoba, M. & Sarkar Arani, M. R.(2005). "learning from Japanese approach to teachers' Professional development: Can UGYOU KENKYU work in other countries? *Comparative Education in Teacher Training*. 3: 55-58.
- 的場正美・サルカールアラニ モハメドレザ・花崎恵理・伊藤久仁香・白山真澄・可児美佐子 (2006) 「アメリカにおける授業研究の動向と挑戦 (1) —スティグラー・グループの研究課題と成果の分析—」『中等教育研究センター紀要・名古屋大学大学院教育発達科学研究科』第5 & 6号、51-68頁。
- 的場正美・サルカールアラニ モハメドレザ (2006) 「授業研究を基礎とした校内研修と教師の資質に関する国際共同研究 (4) —「学習する組織」という学校における教師の教育実践の質—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第52巻第2号、123-134頁。
- 的場正美、Sarkar Arani M. R. (2003) 「授業研究を基礎とした校内研修と教師の資質に関する国際共同研究 (1) —イランにおける授業研究の移転の事例—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第50巻第1号、145-162。
- マーネン、J. (森川 渉 訳) 『フィールドワークの物語』現代書館、1999年。
- 名古屋大学・東海市教育委員会 教育実践問題支援プロジェクト編 (2004) 『授業記録による授業改革のプロセス』黎明書房。

- Perry, Rebecca. Lewis, Catherine.(2003). "Teacher-Initiated Lesson Study in a Northern California District." Paper presented at the Annual Meeting of the American Educational Research Association (84th, Chicago, IL, April 21-25, 2003).
- Santagata, Rossella; Stigler, James W.(2000). "Teaching Mathematics: Italian Lessons from a Cross-Cultural Perspective." *Mathematical Thinking and Learning*, 2.3: 191-208.
- Sarkar Arani, M.R., Shibata, Y. & Matoba, M.(2007). *Delivering Jugyou Kenkyuu* for Reframing Schools as Learning Organizations: An Examination of the Process of Japanese School Change, *Nagoya Journal of Education and Human Development*, No: 3 :25-36
- Sarkar Arani, M. R. & Matoba, M.(2005). "Japanese approach to improving instruction through school -Based In-Service teacher training, *Comparative Education in Teacher Training*. 3: 59-63
- Sarkar Arani, M. R. & Matoba, M.(2002). "School-Based In-Service Teacher Training in Japan: Perspectives on Teachers' Professional Development", 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第49巻第1号、97-110.
- 佐藤学 (2001：初版第4刷、2000：初版)『授業を変える 学校が変わる』小学館。
- 佐藤学 (1997)『学びの身体技法』太田次郎社。
- 佐藤学 (2002：第5刷、1996：初版)『カリキュラムの批評』世織書房。
- 佐藤正彰 (2005：6版、2003：初版)『公立中学校の挑戦』ぎょうせい。
- Schaps, Eric. Lewis, Catherine(1999). "Perils on an Essential Journey: Building School Community." *Phi Delta Kappan*. 81.3, Nov 1999: 215-18
- Sergiovanni, T.J.(1996). *Leadership for the Schoolhouse*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 清水静海、磯田正美、大久保和義、馬場卓也 (2005)『算数・数学授業研究』明治図書。
- Speck,M.(1999). *The Principalship: Building a Learning Community*. Upper Saddle River CA: Corwin Press.
- Stepanek, J., Appel, G., Leong M., Mangan Mi. Turner, Mitchell, Mark(2007). *Leading Lesson Study: Practical Guide for Teachers and Facilitators*. California: Corwin Press.
- Stigler, J. & Hiebert, J.(2004). Improving mathematics teaching. " *Educational Leadership*." 61.5: 12-17.
- Stigler, J., Gallimore, R., & Hiebert, J.(2000). "Using video surveys to compare classrooms and teaching across cultures: Examples and lessons from the TIMSS Video Studies. " *Educational Psychologist*, 35.2: 87-100.
- Stigler, J.W. and Hiebert, J.(1999a). The Teaching Gap. *The Teaching Gap: Best ideas from the world's teachers for improving education in the classroom*. New York: Free Press.
- Stigler, J. W., Gonzales, P. Kawanaka, T., Knoll, S., & Serrano, A.(1999b). *The TIMSS 1995 Videotape Classroom Study: Methods and findings from an exploratory research project on eighth-grade mathematics instruction in Germany, Japan, and the United States*. NCES(1999-074), U.S. Department of Education. Washington, DC: National Center for Education Statistics.

- Stigler, James W.; Gonzales, Patrick; Kawanaka, Takako; Knoll, Steffen; Serrano, Ana (1999c). "The TIMSS Videotape Classroom Study: Methods and Findings from an Exploratory Research Project on Eighth-Grade Mathematics Instruction in Germany, Japan, and the United States." (EJ594268) *Education Statistics Quarterly*, 1, 2 Sum 1999: 109-12.
- Stigler, James W.; Gonzales, Patrick; Kwanaka, Takako; Knoll, Steffen; Stigler, James W.; Hiebert, James (1998a). "The TIMSS Videotape Study." *American Educator*, 22, 4:7 Win 1998: 43-45.
- Stigler, James W.; Hiebert, James (1998b). "Teaching Is a Cultural Activity." *American Educator*, 22, 4 Win 1998:4-11.
- Stigler, James W.; Hiebert, James (1998c). "Understanding and Improving Classroom Mathematics Instruction." *Phi Delta Kappan*, 79,1 21 Sep 1997:14-
- Stigler, J. W. and Hiebert, J. (1998d). "The TIMSS Videotape Study." *American Educator*, 22, 4: 7; 43-45.
- Stigler, James W.; Perry, Michelle (1988e). "Mathematics Learning in Japanese, Chinese, and American Classrooms." *New Directions for Child Development*, 41 Fall 1988:27-54.
- Stigler, J. W. & Hiebert, J. (1997). "Understanding and improving mathematics instruction: An overview of the TIMSS Video Study." *Phi Delta Kappan*, 79,1: 14-21.
- Stigler, James W.; Stevenson, Harold W. (1991). "How Asian Teachers Polish Each Lesson to Perfection." *American Educator: The Professional Journal of the American Federation of Teachers*, 15, 1 Spr 1991:12-20,43-47.
- Stigler, James W.; And Others (1990). *Mathematical Knowledge of Japanese, Chinese, and American Elementary School Children*.
- Stigler, James W.; And Others (1987). "Mathematics Classrooms in Japan, Taiwan, and the United States.", *Child Development*, 58,5 .Oct 1987:1272-85.
- Stigler, James W.; And Others (1986). "Consequences of Skill: The Case of Abacus Training in Taiwan." *American Journal of Education*, 94,4 Aug 1986: 447-79.
- Stigler, James W.; And Others (1982). "Curriculum and Achievement in Mathematics: A Study of Elementary School Children in Japan, Taiwan, and the United States." *Journal of Educational Psychology*, 74,3 Jun 1982:315-22.
- 高垣マユミ (2005) 『授業デザインの最前線』北大路書房。
- 東京学芸大学附属世田谷町学校 (2005) 『授業改革への道しるべ』東洋館出版社。
- 豊田久亀 (1988) 『明治期発問論の研究－授業成立の原点を探る』ミネルヴァ書房。
- Tsuchida, Ineko. Lewis, Catherine (1998). "The Basics in Japan: The Three C's." *Educational Leadership*, 55, 6: 32-37.
- 渡辺雅子 (2004) 『納得の構造－日米初等教育に見る思考表現のスタイル－』東洋館出版社。

【註】

- 1 1) スコット、ベスタロッチ主義、ヘルバルト主義の導入により全国において一定の共通の授

業方法が実施された次期の授業研究の位置づけ、2) 大正時代の多様な自由主義的教育運動の展開と授業研究をどのように区分し、特徴づけるか、3) 戦後の小中学校で実施された授業研究と大学で展開された授業研究をどのように区分し、特徴づけるかという問題が残されている。

2 授業研究を実施している主体と場所に注目して、授業研究を区分することもできる。

例えば、1) 大学の附属学校における授業研究、2) 各学校における授業研究、3) 教育委員会における授業研究、4) 教育サークルにおける授業研究、5) 大学とくに教員養成課程にける授業研究、6) 大学と学校あるいは教育委員会の連携における授業研究、7) 文部科学省支援プロジェクトによる授業研究、8) おもにJICAの支援プロジェクトによる国際的な授業研究等がある。最近では大学と小中学校の連携による授業研究の成果が多く表れている (名古屋大学/東海市教育委員会 2004、Matoba Masami, Shibata Yoshiaki, Sarkar Arani M. Reza 2007)

3 アメリカのLesson Studyが日本のどの学校を調査し、モデルとしたかを確定することは困難を伴うが、具体的事例を対応させることで、多様な日本の授業研究のどの授業研究 (学校の規模、地域、教科) を参考にしていかに推定できる可能性がある。

4 例えば、日本では教師が研究記録を著書として出版しているが、アメリカではマルチメディアのデータベースを提案している。あるいは、協議会での討議の質を高めるために外部講師の招聘も提案している。(Fernandez & Chokshi 2002)

5 例えば、正三角形を教え、次に不等辺三角形を教えることが合理的である。というのは不等辺三角形を二つに分けることで二つの正三角形を作成できる。このことが論じられている。

6 他のクラスの授業を参観したある日本の教師が、参観から帰って来て、泣き出し、自分の学級の子どもに済まない。別な先生のクラスにいたら、この子どもたちは幸せだったのにと、泣き出した事例 (ルイスの報告) が挙げられている。